

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24700251

研究課題名(和文) 不安定社会におけるソーシャルメディアを介したアイデンティティの収束に関する研究

研究課題名(英文) How social media affects our identity in fluid society

研究代表者

浅井 亮子 (Asai, Ryoko)

明治大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：40461743

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近年急速に発達し世界的に浸透しているソーシャルメディアが人々のアイデンティティに与える影響について検討を加えた。とりわけ東日本大震災や「アラブの春」と呼ばれた西アジアの政変においてソーシャルメディアは人々を結びつけ助け合うためのツールとして広く用いられた。災害時や政変時でのソーシャルメディアの利用について明らかにするとともに、その後の人々の日常生活への定着についても明らかにした。さらにアイデンティティ形成にそれが与える影響について言及するため、「絆」と「愛情」に焦点をあて研究を進め、テクノロジーがわれわれの性に関わるアイデンティティや自我にも大きな影響を与えていることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The research shows how people use social media and technology in the critical situation, especially under big disasters and political turmoils, based on narrative and qualitative researches. And also it works on exploring how social media influence and technology the process of forming our identities. First, this research picked up two critical social occasions "the Great East Japan Earthquake" and "the Arab Spring" and considered about the way of social media. Through the research, this research also focused on the emotional bond and love among people in order to show how technology including social media help people grow an intimate relationship. This research conducted some interviews with social media users and explored how people use social media to find their companies or partners. In the process of the interview research, this research revealed sexual orientations and desires also got influenced by technology. And we developed the tool for people's autonomous decision making.

研究分野：情報倫理

キーワード：情報倫理 ソーシャルメディア アイデンティティ ジェンダー 意思決定

1. 研究開始当初の背景

社会的排除問題が注目を集めるようになり久しい現在、よりよい市民社会を構築するために多様な手段が用いられようになっている。なかでも情報通信技術(Information Communication Technology:以下、ICT)の普及、貧困の撲滅や平等促進といった根深い社会問題の解決に寄与するだけでなく、リアル/サイバーを問わずコミュニティの形成と維持とに深く関わることで議論されている。

現在までに全世界でインターネットユーザ数は 20 億人を超え、普及率は世界平均で 30%を超えるまでになった。依然としてインターネット利用において格差がみられるものの、ICT が急速に普及しソーシャルメディアを介しユーザ間で双方向コミュニケーションが積極的に展開される状況において、われわれの生活がソーシャルメディアによってどのように変容しているのかに注目が集まっている。従来までの個別ユーザの行動様式に焦点を当てた分析に加え、世界的にユーザが広がる現在ではその社会的影響についても検証が進められるようになってきた。

また、より良い市民社会環境構築のための方策として、ICT とその発展を基盤とするソーシャルメディアの活用が位置づけられる。現在では、これら新たなメディアを使った情報共有が活発化し、情報を共有したユーザを起点とした新たな社会現象が現実社会で数多引き起こされるようになってきている。

2. 研究の目的

ソーシャルメディアが「アラブの春」にみられるような一国の政治体制をも変化させてしまう市民行動を突き動かす原動力として捉えられ、人々の間での情報共有を支えるツールとしてその有用性が社会的に認知されるようになった。さらに 2011 年 3 月に日本で発生した東日本大震災においては、人命救助や援助へのソーシャルメディアの寄与が注目を集め、多くの人々がユーザとして新規にソーシャルメディアに登録をするに至った。また、テレビや電話等の既存メディアとソーシャルメディアとの相互補完による社会的効果を実際に経験する大きな出来事をわれわれは数多く目にする。

社会不安が蔓延した状況に生きる人々がソーシャルメディアを利用することによって生活をどのように変化させているのかについて、さらにソーシャルメディアを介した情報共有プロセス、ならびにそれが人々のアイデンティティ形成において与える影響について検討をすることを目的とする。具体的には以下の三点が挙げられる。

- ①1990 年代以降を中心として、ソーシャルメディア発展の経緯に関して世界的な動向とともに日本におけるソーシャルメディアの普及の実態を把握する。
- ②危機的状況におけるソーシャルメディアの利用について、実際の社会事象(チュニ

ジア政変や東日本大震災等)をもとにその実態を解明する。

③ソーシャルメディア活用によるソーシャルキャピタル形成・発展の可能性について、a)b)での研究結果を基に考察するとともに、民主的な討論の場としてソーシャルメディアが「第三の場」(Third place)となるかに関して検討を加える。

3. 研究の方法

本研究は、以下に示す手順ならびに方法に基づき進められた。

- ① 1990 年以降を中心にインターネットに関わる文献をレビューするとともに、また実際にオンライン上で観察されたコミュニケーションの記録を用い、従来の研究がどのようにユーザの行動様式やアイデンティティの表出を考察してきたのか体系的に整理する。
- ②社会不安が高まる社会状況でのソーシャルメディア利用の実態を知るため、複数の具体的な事例を用い、個別ユーザに対する聞き取り調査を実施し、平常時/危機的状況におけるソーシャルメディアの影響を比較する。
- ③ソーシャルメディアにおけるコミュニケーションがもつ求心性が人々の集団的行動を誘発しうる側面について、情報倫理の視点からだけでなくソーシャルキャピタル理論からも検討を加える。すなわち、ソーシャルメディアが民主的な討論の場として機能する可能性に関して検証するためである。

さらに本研究では、日本国内の現象だけでなく国外の諸現象にも焦点を当てるため、海外研究者との連携を深め、かつ情報倫理に留まらず多様な視点から同研究の課題を考察することを目指した。

4. 研究成果

(1)平成 24 年度における成果

社会学、倫理学、政治学を中心とする多分野にわたる学際的な知見のなかから、本研究に示唆を与えまた有用となる知見を得るため文献レビューを中心に研究活動に取り組んだ。また文献研究に依拠する一方で、ソーシャルメディア利用におけるユーザの行動様式に関する質的調査が不可欠となるため、どのようなソーシャルメディアの利用状況やコミュニケーション様式がみられるかを各国の量的調査結果等を用いた研究を行った。とりわけ、東日本大震災におけるソーシャルメディアの使用の実態と震災後にどのようにソーシャルメディアが人々の生活に浸透したのかについて具体的な事例を用いて検討を加えた。

また、共同研究を進めているスウェーデンのウプサラ大学においても、ソーシャルメディア利用におけるスウェーデンと日本との比較研究を進め、研究グループ「セキュリティ・アリーナ」を同大学 IT 学部の研究者と立ち上げ、危機的状況に置ける ICT 利用に関する共同研究を始めるに至った。

(2)平成25年度における成果

人々のソーシャルメディアの利用とその利用による社会的影響や利用を促す社会的背景、また人々がその利用においてどのような意思決定を行っているのかについて着目した研究活動を展開した。とりわけ「絆」あるいは「他者への共感」が強調される社会状況において、ソーシャルメディアがどのように人々を結びつけ、人々がそのつながりをどのように捉えているのかについて情報倫理ならびに社会学の視点から検討を加えた。人々がソーシャルメディアを介して他者との交流を図る上では個人の選択・意思決定が他者との関係性に大きな影響を与える。また他者と「つながりたい・つながっていたい」という感情あるいは社会的な疎外感や孤立感が社会的に強まりつつあることが明らかになった。

さらに「絆」や共感に焦点をあてた研究の考察過程において、ソーシャルメディアを介して友人、恋人あるいはパートナー等人生を共有するための他者を探す人々にも研究の視点を向けることとなった。こうしたオンライン上での人間関係はユーザのアイデンティティ形成に影響を及ぼすだけでなく、そのユーザの人生をも左右する要素となっている状況がわかった。さらに人々がソーシャルメディアを介してどのように意思決定を自立的に行い、またオンライン上に感情を表出させていくかについて考察を進めることとなった。

(3)平成26年度における成果（最終年度）

実際にオンライン上で他者との出会いを求めるユーザ、またアプリケーションやデジタル技術を介して実在しない二次元のキャラクターやアニメーションに感情移入をするユーザに対するインタビュー調査を行った。同インタビュー調査により、ユーザは実際の face-to-face の出会いとオンライン上のプロフィールをもとにした出会いとは異なるコミュニケーション行動をとっていることがわかった。さらに、実在しないキャラクターに対して感情移入するユーザたちは、それが現実には実在しないことをきちんと認識しており、さらに実際に恋人や配偶者がいる場合もあることから、現実世界（オフライン世界）でのストレスや人間関係の複雑さから逃れ、ユーザを無条件で受け入れてくれる架空の状況を楽しんでいることがわかった。一方で彼らは実在しないキャラクターに対して「愛情」を感じるということから、従来までの人文科学で提示されてきた「愛」や「狂気」といった概念が、テクノロジーの発展によって影響を与えられているのではないかという考えに至った。

さらに自立的な意思決定能力についての考察を進めた。急速に発展する情報社会のなかで人々の公的な生活だけでなく私的な生

活をも従来までの行動様式とは異なるものになってきていることを、政治社会的な視点さらに心理学的視点を取り入れつつ情報倫理学のフレームワークに基づき研究に取り組んだ。個別の意思決定だけでなく政策意思決定において意思決定者はどのように倫理的であることが可能かに関して積極的に研究に取り組んだ。その研究過程では、従来までの情報倫理研究では取り扱われづらい政治家や政策決定者の情報倫理に関わる行動様式の変化に検討を加えるとともに、倫理的かつ自立的な意思決定とそこから発生する責任（社会責任）とに関して社会学の視点を中心として考察を行った。

マックス・ウェーバーの責任に関する議論をもとに、政策決定者が膨大な情報に取り囲まれるなかでいかに自立的に意思決定を行い、またその意思決定に対する責任を全うするのかを検討した。真に負われるべき責任には未来に対する責任が含まれ、広い視野と強い意志によって下される意思決定が社会において必要となっている現状について明らかにした。

上述した三年間における成果は、いずれも国際会議において発表され、現時点では書籍化に向けてさらにこれら研究成果をもとにした研究活動を進めている。また日本国内における学会発表やセミナー（公的機関・教育機関）の開催にとどまらず、海外の大学においても同研究活動の成果に基づくセミナーを開催し好評を得た。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 浅井亮子, ソーシャルメディアがつくる新しい絆のカタチ, 情報経営学会大会予稿集第64回春号, 査読無し, 2012, pp. 141-144.
- ② Iordanis Kavathatzopoulos and Ryoko Asai, Can machines make ethical decisions?, Artificial Intelligence Applications and Innovations, 査読有り, Vol.412, 2013, pp. 693-699., DOI: 10.1007/978-3-642-41142-7.
- ③ 浅井亮子, 情報倫理研究におけるジェンダーの射程, 経営情報学会誌:経営情報フォーラム, 査読無し, Vol.23, No.2, 2014, pp. 158-161.

〔学会発表〕（計18件）

- ① Ryoko Asai and Iordanis Kavathatzopoulos, Social movement and social media, 4th ICTs and Society-Conference 2012, 2012年5月3-5日, Uppsala University, Uppsala, Sweden.
- ② 浅井亮子, ソーシャルメディアがつく新しい絆のカタチ, 情報経営学会第64回大会, 2012年6月2-3日, 明治大学, 千代

- 田区, 東京.
- ③ Ryoko Asai, Social media as informal public spheres: how social media affect social capital in a crisis situation, International Federation of Information Processing (IFIP) 9.2 social accountability and computing and special interest group 9.2.2 on framework of ethics of computing, 2012年6月9日, Uppsala University, Uppsala, Sweden.
- ④ Ryoko Asai and Iordanis Kavathatzopoulos, The paradoxical nature of privacy, The Asian Privacy Scholarly Network, 2012年11月19・20日, Meiji University, Tokyo, Japan.
- ⑤ Iordanis Kavathatzopoulos and Ryoko Asai, IT security and sustainability, IT security and sustainability, ICT4S, 2013年2月14-16日, ETH, Zurich, Switzerland.
- ⑥ Ryoko Asai, Social media influence on cooperation and coordination, ICT-ethics: Sweden and Japan, 2013年3月8日, Linkoping University, Linkoping, Sweden.
- ⑦ Ryoko Asai, Designing "Open Education": How does the ICT-based system function as a new medium of participation for sustainability?, ETHICOMP 2013, 2013年6月12日-14日, University of Southern Denmark, Kolding, Denmark.
- ⑧ Ryoko Asai and Iordanis Kavathatzopoulos, ICT supported crisis communication and dialog, ETHICOMP 2013, 2013年6月12日-14日, University of Southern Denmark, Kolding, Denmark.
- ⑨ Ryoko Asai, Social Media Supporting Democratic Dialogue, CEPE2013, 2013年7月1-3日, Autonomous University of Lisbon, Lisbon, Portugal.
- ⑩ Ryoko Asai, Research in Computer/Information Ethics: A Gender Gap Analysis and Consequences (Panel), CEPE2013, 2013年7月1-3日, Autonomous University of Lisbon, Lisbon, Portugal.
- ⑪ Iordanis Kavathatzopoulos and Ryoko Asai, Methods for IT security and privacy, ICT, society and human beings 2013, 2013年7月24-26日, Prague, Czech Republic.
- ⑫ Iordanis Kavathatzopoulos, Ryoko Asai and Mikael Laaksoharju, Tools and methods for security: Stimulating the skill to philosophize, European Intelligence and Security Informatics Conference, 2013年8月12-14日, Uppsala University, Uppsala, Sweden.
- ⑬ Iordanis Kavathatzopoulos and Ryoko Asai, Can machines make ethical decisions?, Artificial Intelligence Applications and Innovations: 9th IFIP WG12.5 International Conference, 2013年9月30日-10月02日, Paphos, Cyprus.
- ⑭ 浅井亮子, 男女共同参画社会って何だろう?: 日本とスウェーデンの現状から考える私たちの「ライフスタイル」, 平成25年度第1回男女共同参画推進のための意見交換会(招待講演), 2013年10月25日, 墨田区役所, 墨田区, 東京.
- ⑮ Ryoko Asai, Emotion Online, Visual Information and Interaction Seminar, 2014年4月28日, Uppsala University, Uppsala, Sweden.
- ⑯ Ryoko Asai, Between Insanity and Love, Epistemologie Sociale. Autorite Epistemique et Genre, 2014年5月5日, Ecole des hautes etudes en sciences sociales, Paris, France.
- ⑰ Ryoko Asai and Iordanis Kavathatzopoulos, Responsibility and Competence in Political Ethics, 23rd World Congress of Political Science 2014, 2014年7月19-24日, Palais des Congres, Montreal, Canada.
- ⑱ Iordanis Kavathatzopoulos and Ryoko Asai, Philosophical Method and the Conflict Liberty-Security, 23rd World Congress of Political Science 2014, 2014年7月19-24日, Palais des Congres, Montreal, Canada.

[図書] (計1件)

- ① Elin Palm, Ryoko Asai, Kiyoshi Murata, Yohko Orito, Thomas Taro Lennerfors and Iordanis Kavathatzopoulos, ICT-ethics: Sweden and Japan, Linkoping University, 2013, 63(24-30).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅井 亮子 (ASAI, Ryoko)

明治大学・研究・知財戦略機構・研究推進員(共同研究員)

研究者番号: 40461743